

厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
分担研究報告書

男性不妊の実態及び治療等に関する研究

研究者 松宮 清美 大阪大学医学部講師

研究要旨

わが国における男性不妊症の実数、病因、治療内容、妊娠率を調査した。また最近の男性不妊症に対する生殖補助医療の現状も調査した。これらの調査結果から、現在行われている生殖補助医療から生じる各問題の解決に取り組み、適正な不妊治療のあり方を検討した。

った。射精障害に対して、電気射精を2例に

A. 研究目的

生殖補助医療の技術の発展とともに、不妊治療は新たな局面を迎えてきた。このことは男性不妊症の治療にも大きなインパクトをもたらしてきている。現状がどうなっているかということをつまららかにしていくうえで、男性不妊症の治療における生殖補助医療の位置づけをつまららかにしたい。

B. 研究方法

わが国の男性不妊症の病因、検査、治療の最新の状況を1996-1997年の2年間を対象に全国調査する。この調査に協力する形で当施設の実態をつまらめた。

C. 研究結果

当施設における初診患者数は2年間で145例で、全新患者に占める割合は2.3%であった。病因としては、精巣因子がもっとも多く97%、精路因子、性機能因子は3%を占めるに過ぎなかった。治療としては、非ホルモン療法がもっとも多く36%、ホルモン療法が14%、手術が17%に施行されていた。生殖補助医療としてのTESE、MESAなどの採精術は関連施設に依頼している関係上2例施行されただけであ

施行した。

D. 考察

男性不妊外来患者の割合は1%前後とされているが、2.3%と高率であった。当施設の近隣には男性不妊を診療する施設がないためであると思われる。病因で見ると、ほとんどが精巣因子であることは特異的であるが、これは初期治療に反応しない難治例の紹介が多いためと考えられる。治療法としては平均的であると思われるが、採精術は関連施設に集積している関係上当施設での施行は非常に少なかった。射精障害に対する電気射精は実施施設が少なく継続してゆきたい。

E. 結論

当施設は難治例の紹介患者が多いこと、関連施設と連携していることからやや特異な状況であった。

F. 研究発表

なし

G. 知的所有権の取得状況

なし